

最新ワクチンでなければコロナ重症化は予防できない？ 米国医師会の内科専門誌に論文

8/25(日) 日刊ゲンダイ



【役に立つオモシロ医学論文】

新型コロナウイルスは世界各地で独自の変異を繰り返した結果、さまざまな変異株が報告されています。2023年から24年の初頭にかけて、同ウイルスの主流株はオミクロン変異株の派生型である XBB 系統でした。そのため、23年秋冬の接種において用いられた新型コロナウイルスワクチンも、XBB.1 系統に対応していました。

一方、XBB 対応ワクチンの有効性を検討した質の高い研究データは限られており、従来ウイルス株に対応したワクチンと比べて優れた予防効果を期待できるのかにつ

いて、議論の余地も残されていました。そのような中、新型コロナウイルス感染症による入院リスクに対する XBB ワクチンの効果を検討した研究論文が、米国医師会の内科専門誌に、24年6月24日付で掲載されました。

米国で行われたこの研究では、新型コロナウイルスの検査で陽性を認めた入院患者 2854人と、検査で陰性だったものの、咳や発熱、咽頭痛など、呼吸器感染症の症状で入院した 1万5345人が対象となりました。研究参加者に対して、新型コロナウイルスワクチンの接種状況を調査し、入院リスクとの関連性が検討されています。なお、研究結果に影響を与え得る年齢や性別、治療中の病気の有無などの因子について、統計的な補正が行われています。

その結果、XBB ワクチンを接種していた人では、同ワクチンを接種していない場合と比較して新型コロナウイルス感染症による入院リスクが 62%、統計学的にも有意に低下しました。一方、従来ウイルス株対応ワクチンについては、過去の接種回数に関係なく入院リスクの低下は認められませんでした。論文著者らは「新しい流行株に対応したワクチン接種の推奨を支持する結果である」と考察しています。

(青島周一／勤務薬剤師／「薬剤師のジャーナルクラブ」共同主宰)

WHO が緊急事態宣言…重症化リスクの高い「エムポックス」世界流行の兆し

8/22 日刊ゲンダイ

WHO（世界保健機関）は 14 日、アフリカで感染拡大中のエムポックス（サル痘）を「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」と宣言した。この病気は 1970 年に現在のコンゴ民主共和国で動物から人への感染が確認された人獣共通感染症で、クレード I とクレード II の 2 系統がある。現在感染が拡大中なのはクレード I と呼ばれる菌株で、2022 年に世界的感染流行となったクレード II よりも重症化リスクが高いとされる。

日の WHO の定例会見では今年に入りコンゴ民主共和国では前年同期比 160%増の 1.4 万人以上の感染者と同 19%増の 551 人の感染死が報告された。しかも、これまで感染例が報告されていなかった隣接 4 カ国でクレード I 感染が 50 件以上報告されているほか、多数の疑い事例があるという。さらに上記 5 カ国以外にもクレード I の症例が報告されていて、15 日には、アフリカ大陸以外で初めてスウェーデンでクレード I の感染者が報告された。

なお、日本でも 2022 年 7 月に初めて患者が確認されて以降、累計 248 例の感染事例が報

告されていて、今年も 15 例（東京 12 例、神奈川 2 例、京都 1 例）が確認されている。エムポックスはウイルスを保有する動物との接触で感染するほか、感染した人の体液、血液、飛沫などでも感染する。感染した人が使った寝具でも感染したとの報告もあり、強い感染力があるとされる。「プライベートケアクリニック東京新宿院」の尾上泰彦院長が言う。「患者の大多数は男性同性愛者ですが、女性や子供の症例も報告されています」

この病気に感染すると発熱や発疹が出て顎の下や鼠径部などにリンパ節の腫れが現れる。皮疹が顔や四肢に広がり、皮膚の 2 次感染、敗血症などを起こすこともある。

「私のクリニックではすでに高齢者を含む複数の患者を経験しており、感染拡大は他人事ではありません。怖いのはこの病気を日本の医師の多くが知らないことです。エムポックスを引き起こすサル痘ウイルスは天然痘の仲間であることから、天然痘の薬が効果があるとされていて、欧州では天然痘のために開発された抗ウイルス薬を承認しています。日本では、日本企業が開発した LC16 と呼ばれるワクチンがエムポックスの予防に使用することが許可されています。しかし、この病気の症状を知り、それを疑ってかかればこの病気を見過ごしてしまい、感染を広めてしまうかもしれません。日本でも早急な対策が必要だと思います」